

Opera スカラ座の《椿姫》

「ミラノ・スカラ座の《椿姫》」といえば、この役でスカラ座に君臨したマリア・カラスとの比較等で、手放しの成功を手にするのは容易ではないが、そのようなオペラ史の1ページに刻まれるかもしれない上演を、3月11日に所見した。

140年間、この演目でドラマを生み続けたスカラ座で、イタリア・オペラ界の生き字引的存在のネッロ・サンティがトスカニーニの直筆メモを尊重しながら指揮し、ヴィオレッタで一世風靡したアンナ・ネトレブコは熟成した声でこの役に返り咲いた。その脇を「スカラ座のテノール」フランチェスコ・メーリと「最後の御所バリトン」レオ・ヌッチが固める。

「序曲」はオーケストラにバラつきが聴かれたが、物語が進むうちに研ぎ澄まされ、舞台上で展開されるドラマと完全に調和したタイミングや音色で登場人物の生の感情を雄弁に描く。決められたテンポに合わせるのではなく、自然発生的に舞台上の「間」に合わせて音楽が生まれてくるので上等な映画を観ているようにリアルだ。コンサートマスターのリードも美しく、劇場全体がむせび泣くような響きに包まれた。

ネトレブコは冒頭からアンサンブルを突き抜ける声で意欲を見せ、細やかな感情まで豊かな声で聴かせた。2005年のスタイリッシュなヴィオレッタを脱皮し、オペラの殿堂で通用する椿姫の仲間入りをしたことに敬意を表したい。〈パリを離れて〉を筆頭に、限界に挑戦するかのようなゆっくりしたテンポだったが、結果と



今回の上演はオペラ史の1ページに刻まれるかもしれないものとなった。スカラ座の《椿姫》から
© Brescia e Amisano / Teatro alla Scala

Scramble Shot

してこの一流の歌手陣のみ実現可能な最大スケールの《椿姫》となった。(中 東生)

